

# くらしの協同化と 住民参加のまちづ くり

川地素睿（日本労協新聞編集部）



## はじめに

高度成長期の大量生産方式の熱気に乗って、野放図なはめ絵のように増殖した住宅や団地が危機を迎えている。一つは高齢化に直面していること、もう一つは建物そのものの崩れはじめているということにある。商店街も元気がない。郊外型の大型店舗に客を奪われ、シャッターが閉まったままの店が増え、活気が失われている。それらの本質的な問題は、この日本を覆った大量生産・大量消費方式の増殖が地域のコミュニティや人間関係を切り崩すことによって成り立ってきたことにある。

一方で、自らの実感と想像力に支えられて、人間でありつづけたい、人と人をつむぎ続けたい、人と人が力と知恵と経験を寄せ合うことへの思いを発進する人達がいる。

この分科会は、そうした協同への流れを「暮らしの協同化」にふくらませ、実践事例の中から交流していこうとする試みである。この機会が「さらなる出発点」として、地域と町をどうしていくのかという課題を継承する「関係づくり」のなるよう、望みたい。

## 分科会概要

地域住民の生活を支える商店街再生の実践が着実にひろがっている経験を、地域通貨「ピーナツ」で商店街を元気にしたゆりの木商店街の海保さん、空き店舗を活用した商店街活性化事業で、地域のたまり場を開設している藤沢の田中琢磨さんの2人が報告。「楽しいから元気」という言葉が印象的だ。

また、集合住宅の中での高齢化や立て替えへの対応という面から、住民が支え合って活動に取り組んできた船橋市高根台団地の経験、住民が主体的に参加してあたらしい公共型施設計画を創り上げている千葉県四街道の福祉センター建設での取り組みが報告された。さらに、阪神震災後の災害復興の市営住宅を老若男女が住みあうコレクティブハウジングにしてきた例も報告された。

いずれも大学の集団が関わっており、地域と学問との新しいあり方を示す事例としても注目される。

自らが住む場所を選びたいと、資金・企

## ■コーディネーター

古谷直道( 労協センター事業団 )

## ■報告者

海保 眞( ゆりの木商店街・MADOKA )

田中琢磨( 藤沢地域福祉事業所「あかり長後店」)( NPO COCO 湘南 )

新井信幸( 千葉大学延藤研究室 )

高野洋平( 千葉大学延藤研究室 )

森永良丙( 千葉大学 )

宮前眞理子( NPO コレクティブハウジング社 )

## ■コメンテーター

川岸梅和( 日本大学 )

画・設計・建設に関わりつくり上げるコレクティブハウジングの例を、荒川区日暮里にある「かんかん森」の宮前眞理子さんとCOCO 湘南の田中琢磨さんが報告した。

自分たちが「主体」となることが地域を住宅を人を変えていく事例が報告され、刺激に満ちた報告になった。参加者は、30名。コーディネーターは、労協センター事業団の古谷直道さんが、またコメンテーターは日本大学の川岸梅和さんが務めた。

## 報告概要

### 第1報告

#### くらしの協同化と住民参加の町づくり

##### ゆりの木商店街・海保眞さん

ゆりのき商店街は、西千葉駅すぐの30店程の商店街。地域通貨「ピーナツ」を人間関係の潤滑油にして、元気な商店街になり注目を集めている。

20年間美容院を経営している。親子4人で四畳半に住んでいた時代から最盛期には5軒の店を持っていた。バブルの時代はお金

がすべて。人間の価値はお金があるかどうかだった。あつという間にバブルがはじけて、いまは、一軒だけです。私がいる「ゆりの木通り」も、みごとに寂しい町になってしまった。

4年前おそば屋さんが出店して「商店会に入りたい」といつてきたが、商店会がありませんでした。テナント数が多いので、商店街どうしや地域住民との交流がほとんどない。大型店も近くにでき、売り上げも減った。

何とかしなければと思っても、どうすればいいのかわからない。3年前、NPO まちづくりサポートセンターから、地域通貨の「ピーナツ」をやらないかと話があり「やります」と手を上げた。花束をつくったら通帳型の台帳に2000 ピーナツとか記入し、「アミーゴ」と大きな声で明るく叫んで握手。それが楽しそうで仲間が増えていった。

サラリーマンで花の愛好家が「商店街に花を飾ろう」と花いっぱい運動をやったり、毎日「アミーゴ」してげんき・元気とやっていたら5%売り上げが伸びた。なによりみんなが元気になったのが嬉しいこと。「楽しそう」と、もう一つの商店街にも広がった。地



域通貨は、人と人との関係をつむぎ、それを通じて人らしい関係をつくることです。元気な商店街は人が元気になるにつくれない。

ここで、海保さんが「さあ、みんなでアミーゴをやってみましょう。元気な声で」と。「声が小さい、笑顔で」と言われながら参加者全員で握手しながらアミーゴ。ひとしきり参加者の交流が深まった。

## 第2報告

### あかり長後店の経過、現状、展望

#### 藤沢地域福祉事業所「あかり長後店」

#### 田中琢磨さん

藤沢市で一番空き店舗の多い長後商店街で、市と商店街に提案し「中央市街地活性化事業」の助成を受け「ふれあいの場」を開設。地域福祉事業所を開設し、総合的な生活支援をめざし活動している。

学生時代、大阪の堺にいて阪神大震災に遭った。実家が神戸にあったので慌てて帰

ろうとポケットをさぐったら10,500円しかない。先輩の支えで神戸へ向かった。世界が変わっていた。見慣れた町がなくなっており、仮設住宅でボランティアをした。震災で助かった高齢者が孤独死で2週間後に発見されたこともあった。それまで児童福祉を学ぶだけだったが、このことで初めて地域が見えた。そうして労協に出会った。

はじめは、藤沢で高齢者の就労を事務局として担当していた。70歳過ぎた人が元気にしっかり働いていることに驚かされた。人は、仕事を通じて仲間としての思いやりを持つことができる。しかし、昨日まで元気な人が突然倒れることも何回かあった。

「協同という言葉をいいながら、そんな人も助けられへんのか」と思い、生活を支援する2級ヘルパー養成を開講。介護だけでなく自立を支援するたまり場をつくりたいと考えるようになった。藤沢市の産業振興課から商店街の空き店舗対策として、活性化のための企画を助成するという話があった。藤沢で一番空き店舗の多い長後商店街は、シャッターが下りているお店も多い。200軒の商店街があっても喫茶店が1、2軒しかない。お客さん、特に高齢者が休む所もない。

2001年12月2日に空き店舗を活用してコーヒー1杯100円で飲める「ふれあいの場」を開設した。はじめは、人が来ない。ヘルパー講座修了生が中心になって6000枚のチラシ配り、広報に力を注いで、少しずつ人が休んで話していく場になった。場を提供し、そこにきた人が企画し事務局としてその運

営に協力する形にした。地元の漫画家が展示したり、折り紙教室をやったり、フラワーアレンジメントやビーズアクセサリー、おもちゃの病院などつぎからつぎへと企画が続いている。ひとつひとつを成功させるために真剣に取り組んで、成功させてきたことが自信につながっている。これからは、ここを基点に介護事業・子育て支援事業・福祉用具貸与事業をはじめ、生活支援を軸にした地域福祉事業所を本格的に展開していきたい。さらに、自治体との関係を深め介護予防型デイサービスを考えていきたい。

### 第3報告

#### 地域住民による高齢者の生活を支える活動 一船橋市高根第団地の福祉ボランティア活動

千葉大学大学院 新井信幸さん

大規模団地の高齢化、立て替えに対して、居住者自身が知恵と力を寄せ合って組織と人を育て対応してきた実践例。

社会福祉が「施設」から「在宅」「地域」へと移行しつつある中で、慣れ親しんだ環境を大切に、住民同士の相互扶助的生活支援が重視されるようになった。そのことが地域社会を生き生きさせ、心のふれあいをも豊かにすることにつながっていく。そんな取り組みが高根台団地でも取り組まれてきた。高根台団地は4650所帯の大規模団地である。昭和36年入居当時は原野の中の「陸の孤島」といわれていたが、住民運動や生協も先駆的に始まっていて、行政にも一目置かれてきた。近年、高齢化が激しく（船橋市は12・6%、高根台団地は23・6%）、一人暮らしの孤独死や、立て替え計画により空き家の増大などの諸問題に対し、団地居住者

は10年前から話し合いを進めてきた。現在では、ボランティアグループや地区社協、団地自治会が連携して、共同で事務所を構え情報の共有や知恵や工夫を出し合っている。お祭りの時には、身体の悪い高齢者のために居住部屋の前で「おはやし」を演じたり、子供達が「お弁当配達」をして交流したり、高齢者の前で「呆けの寸劇」をしたり、人と人の関係づくりにも心をくわしている。

#### 高根台団地助け合いの会 浅野玲子さん

民生委員をやって、100軒を担当してきた。介護保険に対応する認定は1～2か月かかる。その間どうするのかと、お手伝いをする100名の協力会員をつくっている。建て替えでは600所帯が移動した。70歳以上が1100人いる。一人暮らしが多く、次の日からどうすればいいのと心配で不安な毎日を過ごしていた。相談に乗ろうと、共同で事務所を設け対応している。その中で千葉大の学生とも知り合って公団に提案を協同してきた。

団地で、昨年も孤独死が5件あった。徘徊老人もいる。中に閉じこもるとなかなか外からは見えない。ふらっと気軽に寄れる場所をつくりたい、コーヒーでも飲めるような所を、と公団と折衝した。管理運営は住民がやってくれるならというのでNPOをつくりコーヒー店をつくった。公団はいろんな事から手を引いていくだろうと思う。よりよい居住環境は居住者自身が力をあわせてやっていかなければならないと思う。

### 第4報告

#### 住民参加型公共施設計画の今後の展望 一千葉県四街道市の事例

千葉大学大学院 高野洋平さん

四街道市が建設する南部福祉センターを、従来の専門家まかせの計画からワークショップ方式を採用してユーザーである市民も参加。何のための公共施設をつくるのかの理念を掲げて、基本段階から設計管理運営まで参加。今後の新しい公共施設のあり方に示唆を与えるものになっている。

平成13年から1年間、老人福祉センター・児童センター・地域コミュニティセンター・簡易マザーズホーム・ボランティア活動室・福祉ショップ・共用部の7つの複合機能を持つ福祉センター建設計画を行政・設計者・大学・市民（NPO）が、ワークショップで企画・運営した。

地域の拠点として、市民が憩える場所を市民が参加してつくろうとする試みで、8回のワークショップを通じて、実感的に施設の外観と中身に関われるようになった。

敷地を実際に参加者で見学して、陽のあたり具合を実感したり、感じたことを俳句にしたり、施設の利用計画を寸劇にする等の楽しい工夫もみられた。3つの案がそれぞれのグループから出され、全体で評価し、いいところを取り入れて最終的な計画案がつけられていった。それに基づいて、模型をつくり、現地で実寸大の縄張りをして実感を高め基本設計案に合意が形成された。

「気持ちづくり」から「形づくり」へと発展してきたのだが、それぞれが主体になって出

来ることできないことを明確にし密接な関係をつくる中で、相互に理念を深め、ワークショップ終了後、参加者が自ら施設運営実行委員会を立ち上げ活動を続けている。

## 第5報告

### 老若男女が共に住みあうコレクティブハウジング

千葉大学工学部 森永良丙さん

阪神淡路大震災が、ボランティア活動や共生や協同のあり方、ひいてはこの国のあり方へ問いかけたものは大きい。食ること、住むこと、心を支え合うことがどれほど大切なものなのか。この住まい方は、個人の自由や自立を前提としながら、日常生活の一部一食事、洗濯、趣味の空間を共同化する住まい方である。未曾有の災害の中で生きぬき、住民が選び取った住まい方に大いに注目したい。

コレクティブハウジングは、スウェーデンではじまった共生型集合体である。神戸真野地区の「真野ふれあい住宅」は95年の



阪神淡路大震災後の災害復興計画として98年に29戸（高齢者向け21戸）が竣工。建設に先立ち、神戸市では研究会を発足させ、入居者の声を取り入れた計画づくりの提案がなされた。

「協同で出来ることは協同で」するというのが、コレクティブハウジングのコンセプトだが、この住宅はワークショップで住まい方を深めていったこと、地域に開かれた共生の住宅、住民同士の支え合い文化を大事にしたことで、いわば路地裏文化とでもいべき住まい方を実践的に提唱することになった。ワークショップは、初めから住まう人だけでなく、お医者さんをはじめとした地域住民とが一緒に参加し、どういう住まいにするのか、住まい方をするのかを意見交換し深めていった。

この地域は、震災前から地域運動が活発であったこともあり、できあがる住宅は地域の資源でもあるという考え方も根付いていたこともある。それでも、最初の段階では性格や文化の差があり、なかなか難しい場面もあったが、月1回の映画会などのイベントを開き、協力しているお医者さんが集まった人の健康相談をしたり、週1回程度のコーヒーやパン、サラダなどの簡単な食事会が好評で、そうして集まった事が力になっていった。地域のお年寄りも遊びに来るようになったりして、「いっしょに食事する事が楽しい」という声が多く、その積み重ねが「ふれあい住宅」に結実していった。

7月には「感謝の集い」が開かれるようになり、いまでは、住民の若手が主体になって、この住宅の運営に力を入れていて、人もこの運動の中で育っている。

ふれあい住宅はその名のとおり、住宅の

バルコニーに仕切がなく、自由に行き来出来るように設計されている。玄関から出て玄関の扉を開けるということがない。雨が降っても、風が吹いてもお互いがお互いの生活に関心を持ち合い、洗濯物を取り入れたり、おかずを持ち寄ったりする、いわば「路地裏文化」が生きている。足腰が弱った高齢者はみんなが支える。元気な人が弱った人を支えるのは、ここでは自然なことだ。人と人との関係をつくる、それがふれあい住宅だ。

## 第6報告

### コレクティブハウスかんかん森の試み

NPO コレクティブハウジング社

副理事長 宮前真理子さん

高齢期の日常生活を共にする住まい方は、近年少しずつではあるが確実に増えてきている。この「かんかん森」は、居住者が住宅プランをつくり計画をひとつひとつ実現しながら03年6月に完成する予定である。

注目すべきは、居住者が主体になって管理運営を進めていくこともさりながら、多世代の賃貸住宅であることである。コミュニティを包み込んだ新しい住まいのあり方を提案している。

荒川区日暮里駅から徒歩15分の中学校跡地に12階立ての建物が建設される。2～3階は賃貸、4～6階が介護が必要なシニアハウス、7～11階は、自立した高齢者のためのライフハウス。1階にはレストラン、診療所、保育園、12には展望浴室をつくる。荒川区の市民運動に関わっていた人達を中心に、なって入居予定者も口コミで拡がり、その人達で1年半、一緒に考えつつ企画して計画を練ってきた。

各住戸の13%を出し合い、共用のCOMMONスペース166平米を生みだし、2階に食堂・リビング・障害者用トイレなどをつくった。1人ではできなくても、みんながすこしずつ出し合えば、いろいろなことが出来ます。入居予定のメンバーも15歳の高校生から67歳の高齢者までいます。シングルが多く、ファミリーも2人暮らしが多い。お互いがやれること、得意なことを担い合う関係を大切にしている。

普通に分譲や賃貸住宅は、どんな人とお隣になるのか不安だが、この「かんかん森」は建設計画のはじめから参加してつくる『参加できる賃貸』を考えてる。

個の自立を軸に公共の空間と個の空間を分けることで、もたれ合うのではなく育ち合う関係をつくっていく。50代の独身女性は「今まで孤独だった。ここでも「孤独」だけど、「孤立」はしないのでいいですね。生きる力になります。」という。親はシニアハウスへ、自分は賃貸に入るという人も2組いる。

食事も得意技を活かしてチームで作る。15歳の高校生も、みんなの指導をうけて汗をかきながら食事をつくった。

管理は、NPOコレクティブハウジング社が担当するが、暮らしや住まうことは、ただ参加するだけではなく、それぞれが責任をもって担うことにならざるをえない。建設・緑化・広報など11の委員会活動をつくり、こうした協同の営みが人と仲間を育てるといふことを実感している。

### 第7報告

#### 自立と共生、高齢者の尊厳ある暮らしと住まいの提案と実践

NPO法人COCO湘南 田中琢磨さん

「自立と共生」をテーマに、高齢者のグループリビングが湘南ではじまった。高齢者が運営の主体になり、「労協」と連携して地域の中で生き抜く。その実践が第2、第3の試みにつながり始めた。

99年、市議員をしていた西条さんと、長い間生協を育ててきた井之川さんが自分たちが本当に住みたいと思う住宅をつくりたいと話しかけたことがきっかけになった。

公共の施設は規制が多い、もっと自由にいきいきと住まえるはず。ちょうど西条さんの知り合いの農家がナシ畑が持っていて、手頃な大きさだったので、はじめは渋っていたのを担保などをどうクリアするかの提案書をつけて交渉、実現できた。入居金300万円、月の生活費15万円で募集。集まった人と2年間ワークショップ方式で計画を練った。

高齢期の住まいだからこそ、どんな人といっしょに住むのかを確認する事が必要だ。西条さんがコーディネイターとして10名の高齢者といっしょに入居している。長い人生を生き抜いてきた高齢者は、工夫と知恵がある。それぞれの生き方にあわせて、ここでは食事するのもしないのも自由だ。高齢者だけでは、やりきれないことがある。そこで労協と提携して、清掃・料理・買い物などの生活支援を依頼する予定だ。ヘルパーの資格をもっている人も多いので安心だ。

自分たちがまず主体になる、出来ないところは地域の人達と提携していく。そうして、内に閉じこもらず地域の力を活用する事が成功した要因のひとつでもある。もうすぐCOCOありま（海老名市）が出来る。川崎市の方からも、「土地を提供したい。施設をつくって運営して欲しい」という話があ

り検討中だ。これからは、こうした住居という施設づくりにとどまらず、喫茶や子育て支援などを含んで複合的な「場づくり」に取り組みたい。

以上の報告のあと、会場からの質問・意見がだされ、最後にコメンテーターの川岸梅和さんが、次のようにまとめた。

「まちづくり」ということは「まち育て」ということでもある。阪神淡路大震災の話がでしたが、そこで提起された問題は、10年後に全国でどこでも問題になる課題が含まれています。もう一度整理して考えてみる必要があります、まとめると以下の課題をどうするのが問われたのではないかと思います。

- 1 密集市街地の再生  
住民参加の町づくり・マスタープラン
- 2 老朽マンションの立て替え
- 3 高齢者・障害者への福祉、介護
- 4 NPOとボランティアの育成
- 5 住民主体、市民参加のまちづくり
- 6 自律と連帯のネットワーク社会

いまは、「共同」から「協同」「協働」といわれていますが、協同のCOはいろいろな意味を含んでいて、広がっています。

CO-llective CO-operative CO-llaboration CO-existence CO-mmunity CO-mmon など「COを膨らまし続ける地域社会」といえます。

今日の話は「地域」が、重要な課題になりました。もう一つは「個」と「自立」ということでした。個というのは、個性的な生き方、住まい方を大切にするということです。自立は、自立と自律で、担い合う、関わり合うということですね。住まい方では、個住は、個

性的な住まいに、集住は集合住宅につながります。これからは、公と私の間に協という関係・領域があるのではないかと思います。

そうした意味で、今日の話から教えられたことは、

き 気持ちよい市民居住者の参加活動  
よ 横のつながり、交流の大切さ  
う 運営の配慮  
ど 同世代を生きる市民の姿勢  
う 生みだし、つむぎだし、次世代に残す社会資産

という言葉です。

最後に、コーディネーターの古谷さんが、「いろんな難問をかかえているが、協同に取り組んでいる人は元気です。もっと良いものにしあげていくために頑張りあいましょう」と結んだ。

(参加者の感想)

- ・ どの報告者の方も、人と人とのつながり、担う人の共生への実践が見られました。(54歳男性)
- ・ 地域通貨+コレクティブハウス等、地域での実例が聞けて参考になった。(34歳男性)
- ・ 千葉市、高根台、四街道、真野、神々木どれも人と人とのつながり、担う人の共生への実践をみることができました。(54歳男性)



